

震災で再認識した、主任者の責務



この人：獨協医科大学 RI センター 高橋克彦 氏

この人、こんな所

インタビュー担当：放射線安全取扱部会広報専門委員会
鈴木朗史（長瀬ランダウア(株)）

北関東自動車道の壬生インターチェンジを下りてすぐのところに獨協医科大学があります。電車の最寄り駅は珍しい名前とのこと。また、そう遠くないところに自治医科大学があり、医大が立ち並ぶ全国的にも稀有な地域です。今回はこちらの医学部と大学病院の従事者の管理をされている高橋克彦氏にお話を伺いました。

鈴木：獨協医科大学がどちらにあるのか、ご存じない方もいらっしゃるかと思います。

高橋：本学は地図上で、宇都宮市と栃木市のちょうど真ん中辺り、下都賀郡壬生町に位置し、緑豊かで平坦な地形に約 27 万 m² の広大な敷地を有しています。キャンパス内には、医学部、看護学部、附属看護専門学校及び大学病院が設置されています（写真 1）。最寄りの駅は東武宇都宮線おもちゃのまち駅です。この全てひらがなで表記された珍しい駅名は、1960 年代に玩具工場が相次いで誘致されたため付けられ、駅の北東一帯に隣接する工業団地は、某有名おもちゃメーカーと関連企業が軒を連ねています。

鈴木：駅名だけでなく、町名でもあるみたいですね。驚きました。では本題に入って、先生が管理を担当されている放射線施設の紹介をお願い



写真 1 獨協医科大学並びに大学病院全景

いたします。

高橋：医学部の非密封 RI 管理区域は、“基礎医学 RI 実験施設”と呼ばれ、実験動物センタービル 1 階に隣接して設けられています。主な利用者は、生化学や薬理学の研究者で、最近は利用が足踏み状態です。一方、隣接する大学病院にも非密封 RI 管理区域があり、こちらは“臨床医学 RI 実験施設”と呼ばれています。大学で登録された従事者は、どちらの実験施設でも利用可能となりますが、登録事業所としては大学事業所と病院事業所と異なるため、病院の放射線取扱主任者との連携が必要となります。

放射線業務従事者、並びに放射線診療従事者の管理は、大学組織である RI センターに集約され、それぞれに専任された主任者が協力しながら業務を進めております。

大学事業所内には、非密封 RI 管理区域が 1 か所存在するだけですが、病院事業所内には、非密封 RI 管理区域のほか、放射線治療用の直

主任者 コーナー

線加速器や密封 RI 大線源を装備する照射装置が設置された放射線治療管理区域、並びに薬剤製造用のサイクロトロンを備える PET センター管理区域等が存在するため、放射線管理者の負担が大きくなります。そこで本学では、RI センターに管理スタッフを集約して、それぞれの事業所の任をこなしながら、協力して管理する体制になっています（写真 2）。

鈴木：変化に対応しながらスタッフの皆さんで上手にやりくりしているといった感じでしょうか。

高橋：そうですね。変化といえば近年、放射線業務従事者として登録を希望する実験者は減少傾向にあります。そのような中でも、アジア近隣の留学生や研究者が増える傾向にあります。現在、タイ、並びにベトナムの研究者を数名受け入れています。いずれも日本語が全く喋れないため、教育訓練や実験機器の説明などでは苦労いたしました。放射線安全管理は、まず従事者とのコミュニケーションが重要となります。前任者から引き継いだ後に一番初めに取り掛かったのは、教育訓練の資料並びに管理区域内表示の日本語と英語の 2 か国語表記でした。これらの作業では、大学等放射線施設協議会が作成して公開している、「英語による教育訓練テキスト」が大変参考になりました。協議会の会員ではない当施設でも、事務局に電子メールで申請することによって、審査の上、利用が認められました。同様の悩みを持つ主任者の方々にもお勧めしたい資料です。もちろん、日本アイソトープ協会が発行している「英語版ビデオ法令入門」等の教育訓練 DVD も、大きな助けになったのは言うまでもありません。

鈴木：最近では何か苦労されたことはありますか。

高橋：近年の活動で、最も象徴的だったのは、2011 年の東日本大震災に伴う東京電力福島第



写真 2 スタッフ一同

一原子力発電所事故への対応だったと思われます。事故のあった福島県浜通りの原発立地点から南西におよそ 150 km 離れた当大学キャンパスにも、放射性プルームの影響が及び、その対応に関して放射線防護の専門家である放射線取扱主任者への要求と期待が一度に高まりました。福島県内から転院する患者受入時のサーベイ、医療従事者の放射線防護、職員に対する放射線リスクコミュニケーション等、事故からのおよそ 1 か月間はめまぐるしく変化する状況への対応で追われ、帰宅する時間も制限されました。

その後、総務省被災者支援特別行政相談所の放射線相談担当として現地に派遣され、被災直後の福島県内で放射線リスクコミュニケーションの一翼を担いました（写真 3）。この特別行政相談所は、1 か所に法務局、通信局、財務局、国税局、日本年金機構、運輸局、労働基準局、県並びに市の行政窓口が集められ、ワンストップサービスで被災者の相談に答える目的で開催されたものです。地震や津波被害に加えて、東電福島第一原発の事故が加わり、原子力災害に対する相談の要望が高いことから、日本医学放射線学会に専門家の派遣要請がありました。こ



写真3 被災者支援特別行政相談所の様子

の要請を受け、RIセンターから私が現地に派遣されました。現地の相談所は2011年4月12日の相馬市を皮切りに、同年9月30日まで開催され、福島県内の各市町村、避難所を含めて全22回に参加いたしました。

この対応への経験と実績が、学内の放射線取扱主任者の再評価になり、放射線防護教育への、より積極的な参加や助言を求められるようになったと感じています。

鈴木：獨協医科大学は福島県に近いですから、大きな貢献をされたのではないのでしょうか。話は変わりますが、お休みの日には何をされていますか。

高橋：私の自宅は、長野市にあります。現在は単身赴任の身で、週末にはマイカーで230km離れた自宅に帰ります。日本有数の山岳観光県である長野で育ちましたから、小さい頃より登山やアウトドアは日常でした。大学時代はワン

ダーフォーゲル部に在籍し、北アルプスをはじめとする近隣の山々に親しんできました。近年では、環境並びに農林水産大臣登録となる森林インストラクター資格を取得したのを契機に、長野県内のNPOで子供たちの自然学習の指導などにも力を入れていました。また、職場が栃木県という地の利を生かして、日本におけるフライフィッシング発祥の地である日光国立公園内の湯川、中禅寺湖などで、毛針釣りを楽しんでいました。しかしながら、先原発事故対応と支援で、ここ数年は余暇にかける時間が余り取れなくなってしまいました。休日は静かに家で休養している日が多くなり、少々寂しい思いもしています。

振り返って、放射線の利用は現代人の営みにとって今や不可欠な時代ではありますが、その安全が脅かされると、自然への影響が少なくないことを、身をもって感じさせられました。事故から5年目を迎える今でも、栃木県内で出荷制限が解除されない淡水の魚種も数種類あり、影響の長期化が心配されています。釣った魚を持ち帰らずに湖に戻す、キャッチ・アンド・リリースに理解を示す釣り人が湖に戻ってきつつありますが、規制はしばらく続きそうです。

放射線利用の安全管理を担う1人として、放射線取扱主任者の責務を全うしつつ、また自然の中での活動を好む一市民としては、趣味のアウトドアを心置きなく楽しむように願ってやみません。その実現のために、我々の責務は決して小さくないことを、改めて確認させられたここ数年でした。

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】

上養義朋（委員長）、池本祐志、川辺 陸、鈴木朗史、廣田昌大、藤淵俊王、宮本昌明、吉田浩子